

ザベート・ドートリッシュに関する E. Paranhue の論考である。エリザベートはその優美さと美德により世人の賞賛を得たが、政治に関わらず静穏に過ごしたため義母カトリーヌ・ド・メディシスとは好対照となり、その後忘却されている。

イギリス王チャールズ2世は数々の愛妾で知られているが、その妃キャサリン・オブ・ブラガンサも無視し難い。排斥されて来たカトリック教徒に様々な便宜や居場所を与え、王のカトリック信仰への傾斜を後押しするなど、彼女は国の将来を左右しかねない立場にあった (E. Gregory, 第9章)。

フランス王ルイ15世についても愛人の方がよく知られており、マリー・レクサンスカ妃については、ナティエによる肖像画以外にはイメージが乏しい。しかし、正にこの画に秘められた戦略を論じるのが J. Germann の研究である。質素で家庭的なその姿は、

あえて愛妾や他の王族の肖像とは異なるタイプのものであり、妻としての模範的な姿を強調するものであった (第10章)。

C. Recca はマリー・アントワネットの姉でナポリ王妃となったマリア・カラリーナの指導力を再検討する。批判されることが多い彼女であるが、積極的に国家の改革を支援し、海軍の増強を促すなど先見の明があったことも忘れてはなるまい (第11章)。

本書を見ると、歴史上の王妃に対する関心もジェンダー上の偏見に左右されて来たことを改めて認識させられる。「悪名高い」妃が記憶されやすいのは男性中心の性規範をあてはめているからであり、規範に適合する妃については称揚された後に忘却されるという皮肉な結果となっている。新たな視点から彼女たちの功績や影響を再評価して行くことが求められている。

(栗原 健)

Jón Viðar SIGURDSSON,

Scandinavia in the Viking Age,

Ithaca, Cornell UP, 2022, 224p., \$32.95.

近年考古学の進展を反映したヴァイキングの概説書の刊行が相次いでいるが、本書は、13世紀のアイスランド社会の研究を専門とする歴史家が、それを遡る300年前のヴァイキング時代の北欧内部における展開とヴァイキングの行動原理を独自の視点で概観した著作である。

ヴァイキング社会の特徴を簡潔に指摘した序章に続く、第1章と第2章では、政治的展開を叙述する。ここで興味深いのは、多くの概論では、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンをそれぞれ別個に、もしくは「同等に」扱うのに対し、本書は、デンマークのイエリング王権を中心に政治プロセスを整理していることである。評者の見方も著者に重なるが、これは、ヴァイキング社会を描く上で従来のヒストリオグラフィーに大きな反省を迫る。というのも、三国を「同等に」かつ平行的に発展して中世王国に移行したとするのは、結局のところ、近代の一国史觀を遡及させた叙述であるに過ぎないからである。著者のそのような理解を可能にした諸要素は次の章以下で説明される。第3章「権力のネットワーク」は、王権や在地有力者らが、三国の枠を超えて、婚姻などを通じて幅広くネットワークを形成したことを論じる。第4章「平和と紛争解決」では、しばしば生じるイエ同士の争いをどのように解決し平和を維持しようとするのかという社会の均衡システムを論じる。第5章「名譽と死後の名声」は、ヴァイキングが社会においてある意味最重要視していた他者の視

線について論じる。なおかつ競争的な富の獲得がヴァイキング社会における術式的消費へつながるその条件を分析している。第6章「ヴァイキング社会における階級とジェンダー」は、長らく「自由農民」として「平等主義的」な扱いを受けてきたヴァイキング社会を、差異化のある社会として捉え直そうとする試みである。第7章「信仰と権力」と8章「生活」は、階層化され権力が王権に向かいつつある世界で、農場を単位とするヴァイキングの生活世界がどのように変化するのかを論じる。以上の検討を踏まえて著者は、デンマークの優位が崩れ拮抗する三つの中世王国が成立するプロセスを、内的かつ外的な条件を考慮しつつあとづける。

ヴァイキングの概説では、どちらかといえば略奪・交易・植民という海外との接触に主眼が置かれていたので、スカンディナヴィアの内的展開に主眼を置いた本書は独自の価値がある。すでに述べたように、著者の専門は13世紀のアイスランド、それも「平等主義的」な「自由農民」によって構成される「王のいない自由共和国」という中世アイスランド像の相対化を積極的に推進する立場にある (*Chieftains and Power in the Icelandic Commonwealth*. Odense, Odense UP, 1999)。そのようなヒストリオグラフィーを踏まえるならば、著者によって明らかにされた中世アイスランド社会の特徴を訴求的にヴァイキング時代に適用したように読めるかもしれない。評者もそのような危険性のあることを踏まえて本書

を通読したが、歴史学、考古学、宗教史学などの最新文献を踏まえながら描出されたヴァイキング像は、ルーン石碑や海外の年代記といった同時代史料の精緻な検討ではないとはいえる、一定程度以上の説得力を持っているように感じられた。考古学の成果に基づく交易・植民・生活サイクルに関する成果が爆発

的に増加している現在、文化人類学やニューアーケオロジーと親和的な社会像を示しつつも、権力や紛争解決といった歴史学でなければアプローチし得ないトピックに仮説を示すことで、歴史学の役割を改めて強調したという点でも意義深い小著と言える。

(小澤 実)

Mayumi TAGUCHI, John SCAHILL and Satoko TOKUNAGA (eds.),

*Caxton's Golden Legend: Vol. I: Temporale,
[Early English Text Society, OS 355]*

Oxford, Oxford University Press, 2020, 320p., £65.00.

*Caxton's Golden Legend: Vol. II: The Old Testament Legends,
[Early English Text Society, OS 357]*

Oxford, Oxford University Press, 2021, 321p., £65.00.

13世紀中葉に成立した *Legenda aurea* は中世後期ヨーロッパで広く流布し、各国語に翻訳された。近年その中英語訳の校訂版がオックスフォードを拠点とする Early English Text Society から連続して出版されている。一つは Osbern Bokenham による英訳版で、長年行方不明となっていた写本を 2005 年にスコットランドの Faculty of Advocates で再発見した Simon Horobin が 2020 年に第 1 卷を出版した。2022 年には第 2 卷が刊行予定である。もう一つは今回取り上げる、英国初の印刷所を設立した William Caxton によって英訳、出版された *The Golden Legend* (1483-84; 以下 Caxton 版と略す) である。全体が約 900 ページにも及ぶ長編で、作品全編の学術校訂は中世英文学研究の課題であった。ここに紹介する 2 冊はその校訂プロジェクトの成果の第一弾である。

典礼暦を基本的な枠組みとして編まれた *Legenda aurea* は、地域や時代、編者や写本注文主の個人的趣向といった複数の要因が絡み合い、本文伝播と翻訳の過程で構成や収録内容がさまざまに変容した。とりわけ Caxton 版には他に類をみない特徴がある。「キリストの期節」(Temporale) と「聖人伝」(Sanctorale) という構成は底本のフランス語版に倣いつつも、これら 2 つの間に「旧約聖書の伝説」(The Old Testament Legends) というセクションを新たに挿入して 3 部構成としているのである。今回 EETS から刊行されたのは、「キリストの期節」(第 1 卷) と「旧約聖書の伝説」(第 2 卷) である。各巻は独立し、本文とその註、語彙集、固有名詞の索引が巻ごとに付されている。また第 1 卷の冒頭は序論で始まり、全体の構成内容の解説、「キリストの期節」と「旧約聖書の伝説」の言語分析、翻訳の相違、校

訂方針等が論じられている。なかでも「旧約聖書」の翻訳の一部にウイクリフ聖書が用いられていること、「キリストの期節」とは異なる翻訳スタイルが観察されるという指摘は特筆に値する。加えてこの序論には、現存する Caxton 版の全点（冊子体および零葉、断簡）が図書館別にリストアップされ、地道な書誌学的調査に基づく書誌記述と来歴情報が記録されている。

2022 年 6 月 17 日に刊行された *Times Literary Supplement* の書評にて評者 A. S. G. Edwards は、本書の一定の成果を認めつつも、幅広いジャンルの作品をラテン語、フランス語、オランダ語から英訳した Caxton の業績を踏まえ、*The Golden Legend* の翻訳書としての評価と文学的位置付けが望まれると指摘している。たしかに *The Golden Legend* には複言語の典拠が用いられ、Caxton の翻訳書として重要な一書である。だが Caxton 版全体の 5 分の 1 程度のみを占める今回の 2 冊だけでは書物全体の翻訳を論じるのは難しくもある。「聖人伝」の部は底本が未特定の箇所もあり、加えて版が組み直された帖もあるため複雑な問題が多い。こうした諸問題の検討は、今後続くであろう「聖人伝」の校訂版に期待される。

15世紀ヨーロッパの印刷本は「インキュナブラ」と称され、16世紀以降の刊本とはしばしば区別される。そうした時代区分による分類が必ずしも有用ではないことへの認識は共有されてきた。一方でインキュナブラを扱う場合、中世写本研究や初期近代刊本研究で確立されてきた学術手法では事足りないこともある。その典型とも言えるのが学術校訂である。イギリス文学の分野では、刊本作品の校訂は特に演劇を中心に古くから発展してきた。だがインキュナ